メキシコの経済開発と石油産業

丸　谷　吉　男

1. はじめに

第1次および第2次のオイルショックは世界のすべての国の経済に大きな影響を及ぼしたが，メキシコは，ほぼ時を同じくして発見された巨大な石油の埋蔵量により最も有利な影響を受けた国であり，その思いがけない「天からの授り物」を活用しつつ，「中進国であり，かつ巨大産油国」という世界の経済史上初の実験に挑戦しつつある国である。１９８０年5月および8月に実施した現地調査をもとにその現状と問題点を検討する。

2. メキシコ経済の回復

１９７６年8月３１日に，２２年間堅持されてきたペソの大幅切り下げはエチェベリア前政権の経済政策の破綻を象徴する出来事であった。同年１２月１日に発足したロペス現政権は，①民間経済部門との協調の回復，②労働政策の転換，③混合経済体制の再検討，④行政機構の改革，⑤石油政策の転換，⑥対外政策の転換，など前政権とは大幅に異なる政策をとることにより，メキシコ経済の回復に取り組んだ。

ＧＤＰ実質成長率は７６年1.7％，７７年3.2％，７８年7.0％，７９年8.0％とめざましい回復ぶりを示している。

3. 石油産業の現状

メキシコ経済の奇跡的ともいえる回復をもたらした最大の要因は石油産業の発展であった。原油生産量は７６年９０万b/d，７７年１０９万b/d，７８年１３３万b/d，７９年１６２万b/d，８０年２２５万b/dと驚異的に伸び，その生産量の約半分が輸出にあてられている。あいつぐ原油価格の上昇は原油輸出収入を急増せしめ，国際収支を著しく改善しており，７６年のペソ切下げの当時，メキシコへの融資を拒否した国際金融界は今や競って融資を提供し始めている。

ＯＰＥＣに加盟していないメキシコ石油の生産と輸出の動向は，世界経済，国際政治にますます重要な影響をもつに至っている。主要輸出先は米国，スペ

イン，日本，フランス，中米・カリブ海諸国であるが，すでに１０数カ国との間に輸出契約を結んでいる。

国営石油会社ＰＥＭＥＸの６カ年計画は予定を上回るペースで推進されており，８０年の石油輸出収入は１２０億ドルを越えるとみられている。

4. 国際収支の改善

原油を中心とする輸出の急増により経常収支の改善は著しい。経済環境の好転による外国投資の急増は資本収支の黒字巾を大きく拡大した。国際金融界のクレジット・レーティングの上昇は金利や償還期限の面でメキシコの資金調達を有利にした。観光および保税加工工業収入も好調を持続しており，８０年６月の外貨準備は３５億ドルの史上最高値を記録した。

これらの改善はひとえに石油輸出にもとづくものといえるが，７６年８月前後の泥沼のような国際収支危機を想起させるものはもはやどこにも見受けられない。

5. 投資の活況

石油収入を活用して１９９０年に先進国の水準に達することをめざす国家工業開発計画は公共，民間両部門の活発な投資を誘発している。総固定投資の実質成長率は７８年１6.9％，７９年１8.7％，８０年１６％とみられ，３年連続して１５％を上回った。なかでも鉄鋼，石油，電力がとくに活況を呈した。民間投資の中心は外資との合弁企業によるもので，生産すれば，しただけ売れるという需要と供給のギャップが背景にある。外資の主力をなす米国系企業の８０年の新規投資計画は１０億ドルを上回り，前年比４８％増し，その８６％は製造業向けである。単一国の新規投資が１０億ドルを上回る点に留意すべきであろう。

企業の利益再投資比率についての調査によれば，７９年に利益をあげ，配当を行った９０社の平均再投資比率は６９％の高さを示し，民間資本のメキシコ経済の将来に対する期待の大きさを示している。

6. 高度経済成長にひそむ問題点

以上のように，着実な成長路線を進んでいるメキシコ経済ではあるが，いくつかの問題が顕在化しつつあることを見落してはならない。

第１にインフレの高進であり，８０年上半期に消費者物価は年率ベースで３1.2％，卸売物価も３0.7％に達した（前年は２0.0％，１9.9％）。

第２に，従来のＰＲＩ系の労組とは異なる「独立系」の労組を中心にストライキが多発し，長期化したことは，新左翼系の政党との結びつきともあわせて見逃せない動きである。

第３に，農業生産の危機がある。１９７０－７９年の農業生産は年平均1.6％という低成長であったが，７９年のマイナス３％に続いて８０年も大幅なマイナス成長とみられ，米国から1,０００万トンの食料輸入が必要となり，そのために１９億ドルの支出が予想されている。政府の「食糧自給計画」（ＳＡＭ）と「農業関連産業開発計画」は石油収入を重点的に農業に投資せんとするものであるが，その成果が注目される。

第４に，「石油依存経済」への危険性がある。メキシコの輸出は７８年11.9％，７９年４7.7％，８０年上半期７6.4％と驚異的に伸びてはいるものの，石油関連品目を除くと，2.4％，２3.0％，2.2％の伸びにすぎない。とくに中進国段階に達したメキシコにとって工業製品の輸出成長率が２％にとどまり，逆に資本財，中間財輸入が増加傾向にあることは野党はもとより，政府自体も経済の石油一辺倒化の徴候として大きな危機感をもっている点であるが，その解決は決して容易ではないと思われる。

第１表　主要経済指標

	1970	1976	1977	1978	1979
名目GDP（10億ペソ）	418.7	1,228.0	1,674.7	2,104.6	2,727.3
実質GDP（　〃　）	296.6	398.6	411.6	440.6	475.8
実質成長率　（％）	7.1	1.7	3.2	7.0	8.0
〔GDPの部門別構成〕（10億ペソ）					
農林水産業	34.5	37.9	39.9	41.3	39.7
鉱業	2.9	3.5	3.5	3.6	3.7
石油	12.7	20.1	23.3	26.6	30.5
製造業	67.6	93.3	96.7	105.1	114.0
建設業	13.6	19.8	19.4	22.0	24.6
電力	5.4	8.7	9.4	10.3	11.2
運輸・通信	9.4	15.8	16.8	18.5	—
商業	94.5	120.6	122.0	129.3	252.1
サービス業	59.6	83.8	85.5	89.2	—
金融サービス調整	− 3.6	− 4.9	− 4.9	− 5.3	—
1人当りGDP(米ドル)	682	1,311	1,180	1,386	1,744
全国消費者物価指数上昇率	48	27.2	20.7	16.2	20.0
メキシコ市卸売物価　〃	2.3	45.9	20.0	15.8	19.9
輸出（100万ドル）	1,281.3	3,315.8	4,418.4	6,217.3	8,913.3
輸入（　〃　）	2,326.8	6,029.6	5,889.8	8,143.7	12,097.2
経常収支（　〃　）	−945.9	−3,068.6	−1,623.1	−2,342.3	−4,246.5
外貨準備（　〃　）	820.1	1,411.3	1,967.8	2,303.2	3,087.6

（出所）　Banco de Mexico.

第２表　原油生産量　　（単位：１００万バーレル）

	年生産量	日産量	成長率(%)
１９７６	３２７．３	．８９７	１１．３
１９７７	３９６．２	１．０８５	２０．９
１９７８	４８５．３	１．３２９	２２．５
１９７９	５９０．６	１．６１８	２１．７
１９８０＊	８２１．２	２．２５０	３９．０

（注）＊推定値　　（出所）　ＰＥＭＥＸ。

第3表　原油輸出

	輸出量（1,000バーレル）	成長率（%）	輸出額（100万ペソ）	成長率（%）
1976	34,470	0.3	6,794.8	23.8
1977	73,736	113.9	22,707.1	234.2
1978	133,248	80.7	40,047.7	76.4
1979＊	194,472	45.9	87,823.2	119.2
1980＊＊	293,200	50.8	202,308.0	130.4

（注）　＊暫定値，　＊＊推定値。

（出所）PEMEX。

第4表　国際収支　（単位：100万ドル）

	1970	1976	1977	1978	1979
経常収支	−908.9	−3,068.6	−1,550.3	−2,342.3	−4,246.5
資本収支	460.1	5,202.0	2,513.3	3,223.8	4,554.7
特別引出権	45.4	−	−	−	70.0
誤差脱漏	505.5	−2,454.2	−458.7	−659.0	−89.3
外貨準備増減	102.1	−320.9	504.2	222.5	288.9

（出所）　Banco de Mexico.